

英語AK (2月1日)

1. 出題意図

この試験は、国際学部で必要とされる以下の2つの能力を問うことを主眼としている。第一に、長い英文の論点を素早く把握する能力、第二に、把握した内容を論理的に的確な日本語で説明する能力である。すなわち、本試験は、英語の長文読解能力だけでなく、入学後の勉学に必要な日本語での論理的記述力をも問うものである。

これらの2つの能力を問うために、今年度の出題形式も例年どおり「読解・記述」の形式をとった。時間配分に苦慮する受験生の過去の傾向から、昨年度に引き続き問題数を数年前までよりも絞り、受験生の英語読解力・記述力をより丁寧に見ることを目指した。大問〔I〕では英文和訳1問、文中の英語表現からの計算問題1問、説明問題1問の計3問、大問〔II〕では説明問題2問を配した。

各設問は、文章全体および設問該当箇所の双方の内容を把握しないと自然な日本語で記述できないものとなっている。和訳問題と説明問題はいずれも、前後の文脈に応じて適切かつ自然な日本語で記述する力も採点対象となっている。漢字の誤りも減点対象となる一方、漢字で当然書くべき単語を平仮名で書いた場合も減点対象としている。また、設問の指示（文字数や1マスに1文字の指示など）に従っていない場合も減点対象としている。なお計算問題については、計算力というよりも英語で記述された数字やそれが意味するものを論理的に読み解く力を問うものである。

国際的な視野と学問領域横断型の学びという国際学部の特性を反映し、大問〔I〕ではイギリスにおける国立博物館の入館料無料化施策に関する政治・経済的論考、大問〔II〕では日本社会に根付いたポピュラー文化である紙芝居の歴史・文化的論考を題材とした。2つの大問の難易度は、ほぼ同じである。

2. 解答（解答例）

〔I〕

- A その新構想は、社会的包摂という政府の政策の重要な側面に特によく合致しており、不利な立場にある人々にとって国立博物館への入館を阻む潜在的に重要な障壁が取り除かれることを確実にするものだった。
- B c
- C 入館料無料化以前に多くの国立博物館は施設の改善を大幅に行っていた。無料化と新規投資の組み合わせこそが、来館者数を増加させており、実際に2000年時点ですでに入館料が無料であった博物館や、新規投資を行っていない博物館は1999年から2003年の間、来館者数が横ばいか、減少している。また、入館料が無料になったことを知っていて来場回数が増えたという人は、調査回答者の15%に過ぎず、41%は無料化が訪問回数に影響していなかった。さらに40%の回答者は無料

になったことさえ知らなかった。最も重要な障壁は時間や関心のなさである。無料化は、不利な立場にある人々の来館を増加させる点では有効だが、サービス改善と組み合わせられることが重要である。

〔Ⅱ〕

- A 街頭の紙芝居と教育紙芝居の相違として、第一に、前者は子供が楽しむことを目的としているのに対し、後者は教育目的である。第二に、前者の制作と配給は仲介人が担当したのに対し、後者は機械的に大量生産された。第三に、販売形態として前者は街頭で上演されたのに対し、後者は店で販売された。第四に、前者が紙芝居師というプロによって行われたのに対し、後者はアマチュアによって行われた。
- B 街頭紙芝居は、世界的人気を誇るマンガやアニメの直接的な祖先であり、多くの映画製作者に直接的な影響を与えた。また、今日、紙芝居は娯楽産業や政治的デモ、その他多くの機会であらゆる世代の聴衆に感情豊かなメッセージを伝えるのに用いられている。